

山形県上山市埋蔵文化財調査報告書第2号

上山市思い川B遺跡

発掘調査報告書

1980

上山市教育委員会

序

この報告書は、山形県営ほ場整備事業の実施に伴い、遺跡の緊急発掘調査をすることになったので、上山市教育委員会が主体となり、山形県教育委員会の指導を得て、柏倉亮吉氏（県立米沢女子短期大学学長）を団長とする調査団に委託して実施した、思い川B遺跡の発掘調査の記録であります。

本市には、市街地を貫流する前川と、これに合流する宮川などの流域に、数多くの遺跡が発見されており、本遺跡もその一つであります。

調査の結果、多くの土器・石器などと共に住居跡も見えられ、縄文時期中期の集落跡であることが明らかになりました。

この調査の成果が、昭和50年に調査された、牧野遺跡の記録と並んで、埋蔵文化財に対する理解と、今後の学究の一助となれば幸いです。

このたびの調査にあたりましては、風の冷たい頃から、暑さの厳しい時季までの、長期にわたる作業であり、調査に参加された各位はもとより、多大の御協力と御援助を賜った、山形県教育庁文化課・山形県山形平野土地改良事務所・山形西部土地改良区・上山市文化財調査会・上山市郷土史研究会・上山市史編纂委員の方々に対し、厚くお礼申し上げます。

この報告書は、関係された皆様の総力の結晶であり、市民の皆さんにも、埋蔵文化財についてより一層理解を深めて頂くために、重要な役割を果たすものと信じ、刊行を心から喜びたいと思います。

昭和56年3月

上山市教育委員会

教育長 佐藤 登

例 言

1. 本調査報告書は、上市市高松字向里地区が、山形県管ほ場整備事業に係るため、山形県教育委員会の指導を得て、遺跡の緊急発掘調査を実施することになり、昭和55年5月6日から7月4日までの延44日間にわたって実施した、思い川B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、上市市教育委員会が主体となり、思い川B遺跡発掘調査団に委託して調査が行なわれたが、山形県教育庁文化課の御懇篤な御指導については、厚く感謝を申し上げる。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 上市市教育委員会

調査協力 山形県教育委員会・山形県山形平野土地改良事務所・上山西部土地改良区
上市市文化財調査会・上市市郷土史研究会・上市市史編纂委員

調査担当 思い川B遺跡発掘調査団

団 長 柏倉 亮吉（県立米沢女子短期大学学長）

委 員 武田 好吉 佐竹徳太郎 井上 啓

調査担当者 主任調査員 黒田 啓蔵（上市市社会教育課・主任）

現場主任 会田久一郎

調査補助員 吉田 史子 鈴木 葉子

事務局 事務局長 佐藤 登（上市市教育委員会・教育長）

事務補佐 武田与右工門（上市市社会教育課・課長）

事務局員 庄司 諒三（上市市社会教育課・次長）

事務局員 神保 啓一（上市市社会教育課・係長）

4. 挿図縮尺は、遺構については $\frac{1}{40}$ 、遺物は $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$ を原則とし、拓影図は $\frac{1}{3}$ 、石器実測図は、打製石器で $\frac{1}{2}$ 、磨製石器で $\frac{1}{3}$ として、それぞれスケールを示した。
挿図中の記号は、ST-住居跡、EP-柱穴、SK-土坑、RP-土器、RQ-石器としそれぞれ一連番号を付けた。

目 次

I	発掘調査にいたるまでの経過	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	発掘調査の概要と経過	4
IV	発見された遺構	
	1. 遺跡の層序	6
	2. 遺構の概要	6
V	発見された遺物	
	1. 遺物の出土状況	10
	2. 土 器	10
	3. 石 器	18
VI	調査のまとめ	
	1. 遺構について	23
	2. 遺物について	
	(1) 土器及び土製品	23
	(2) 石 製 品	24

II 遺跡の立地と環境

上山市は、山形盆地の南部に連なっている形作られた、小盆地に位置する。

東部は、蔵王火山そのものと、蔵王火山から供給された火山岩や泥流による緩斜面を作り、その中央は宮川水系による堆積台地をなし、落差の少ない段丘面を作っており、また南部は東西に走る連嶺より落下する急峻な山脈で、稜線が明瞭に現れ、幼壯年地形に見られる様相であり、さらに西部は丘陵性山地でゆるく落ち込み、北部はくびれた形で山形盆地に連なり、急に開けて行く。盆地の中央は、宮川と前川が潤し、北端に近い所で合流し須川の支流を上流をなしている。

上山盆地は、東側に連なる蔵王山系の深い谷々の水を集めた葛蒲川や萱平川、金山川などのいくつもの溪流を合わせて、東から北へ向って大きく曲流する宮川と、南側と西側の溪流を集めて南から北へ向かって蛇行する前川とによって形成された、三日月形の小盆地で、最長径約12km、中央最大幅約4kmである。

盆地のほぼ東半分は、宮川による扇状地を形成しており、この扇状地の扇端部は、標高約180m前後、東へ向かって高くなり、扇の要に当る大門、葛蒲付近で、標高約300m前後になっている。

思い川遺跡は、宮川と前川の合流点（上山市街北東部）から南へ約3km、両河川にはさまれた、宮川扇状地の扇端部、東へ次第に高くなっている宮川河岸まで約1,000m、西へ次第に低くなっている前川河岸まで約500mのところを位置し、標高は185m前後である。

昔から、縄文式土器片・石器片などの出るところとして、地元の人々によく知られ、「山形県遺跡地図」（昭和53年・山形県教育委員会編）にも登録され、上山市文化財年表（昭和55年・上山市文化財調査会編・第二版）にも記録されている縄文時代の遺跡である。

付近には、宮川によって形成された河岸段丘のうち、高位段丘に位置する牧野（昭和50年調査「牧野遺跡」上山市教育委員会）・京塚・藤沢・須田板・榎下・小笹・久保川・大門にかけて、縄文時代の遺跡が数多くあり、特に中期（約4,000～4,500年）のものが多くみられる。

I 調査にいたるまでの経過

上山市には多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年・山形県教育委員会編）には、41箇所の縄文時代～室町時代の遺跡が明記され、そのうち縄文時代については、昭和50年に調査された「牧野遺跡」など28箇所となっている。

このひとつ、思い川遺跡については、地元の古老の方々の話によれば、農作業中に土器片や石器などが発見され、又出土した柱状の石を集めて、農作業の神として畔に祀った風習などの古い伝えがあり、昔からよく知られていたことが伺われる。

昭和55年度に、遺跡の位置する、上山西部土地改良区内において、山形県営は場整備事業が実施されることになり、遺跡のほぼ全域が該当すると考えられるため、昭和54年秋に、山形県教育委員会が遺跡詳細分布調査を行なった結果、縄文時代・平安時代の集落跡があることが推測された。

これに基づいて、山形県教育委員会では、山形県山形平野土地改良事務所・上山西部土地改良区・上山市教育委員会と協議を重ねた結果、遺跡のほとんどが損なわれる恐れがあるため、事前に緊急発掘調査を行なうこととし、上山市教育委員会においても、山形県教育委員会と協力して調査を実施し、遺跡についての記録保存をすることになったものである。

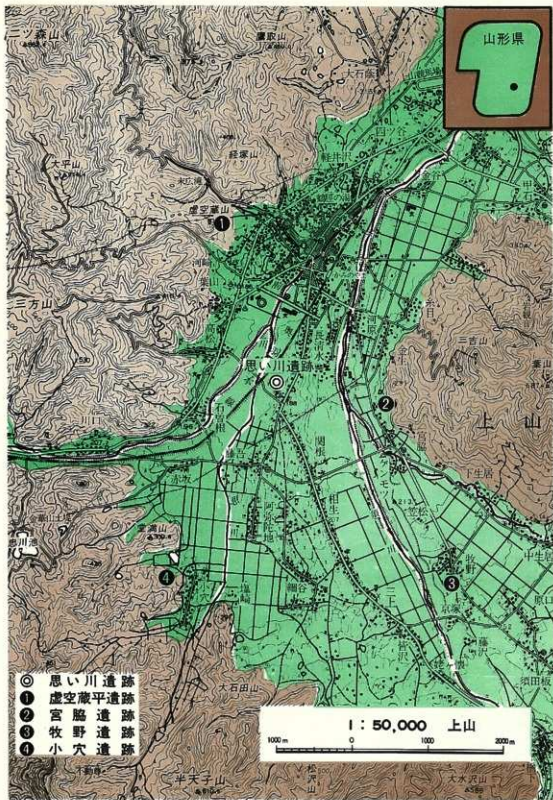
遺跡は、広範囲にわたることが推測されるため、平安時代と縄文時代の遺物の分布する北半を山形県教育委員会、縄文時代の遺物の分布する南半を、上山市教育委員会が調査を分担することにし、県担当地区を思い川A遺跡、上山市担当地区を思い川B遺跡として調査を進めた。

図版目次

図版1	思い川遺跡近景	思い川B遺跡遺構全景
図版2	101・103号住居跡全景	102号住居跡全景
図版3	土器出土状況 (RP10)	土器出土状況 (RP20)
図版4	土器出土状況 (RP58)	土器出土状況 (RP9・10)
図版5	完形土器 (RP10正面)	
図版6	完形土器 (RP10横面)	完形土器 (RP10裏面)
図版7	完形土器 (RP20正面)	
図版8	完形土器 (RP20横面)	完形土器 (RP20裏面)
図版9	完形土器 (RP58正面)	
図版10	完形土器 (RP58横面)	完形土器 (RP58裏面)
図版11	完形土器 (RP72正面)	
図版12	完形土器 (RP72横面)	完形土器 (RP72裏面)
図版13	完形土器	完形土器
図版14	完形土器	完形土器
図版15	包含層出土土器	包含層出土土器
図版16	土製品	土製品
図版17	石器出土状況	石器出土状況
図版18	石器出土状況	石器出土状況
図版19	石器出土状況	石器出土状況
図版20	打製石器	打製石器
図版21	打製石器	打製石器
図版22	磨製石器	磨製石器
図版23	発掘風景	発掘風景
図版24	現地説明会風景	現地説明会風景
図版25	現地説明会風景	調査参加者

插图目次

第1图	遺跡位置图	3
第2图	遺跡全体图	5
第3图	遺構配置图	7
第4图	101・103号住居跡	8
第5图	102号住居跡	9
第6图	105号住居跡	9
第7图	完形土器実測图(1) RP10	12
第8图	完形土器実測图(2) RP20	13
第9图	包含層出土土器(1)	14
第10图	包含層出土土器(2)	15
第11图	土製品実測图(1) 土偶・耳栓・三脚土製品	16
第12图	土製品実測图(2) 三脚土製品	17
第13图	打製石器実測图(1) 石鏃・石錐・石筥・削器	19
第14图	打製石器実測图(2) 石匙・三脚石器	20
第15图	磨製石器実測图(1) 磨製石斧・有孔礫・凹石	21
第16图	磨製石器実測图(2) 凹石	22



第1図 思い川遺跡位置図

III 発掘調査の概要と経過

思い川遺跡は、山形県教育委員会担当の思い川A、上山市教育委員会担当の思い川Bの二地区があるが、隣接するため共通のグリッド（2×2mを一単位とする升目）を設定し、グリッドのY軸は、ほ場整備に付随する市道建設の基本杭を基準とし、X軸はこれと直交する方向に取った。Y軸はN-51°-Eを測る。

はじめ、このグリッドラインに沿って2m×10mのトレンチ（試掘溝）を二地区合せて26本、又バックホーによるトレンチ（2m幅）総延長400mを入れ、その状況から、A遺跡とし縄文時代・平安時代の二つの地区とし、B遺跡としては縄文時代の一つの地区とすることとし、縄文時代の遺構・遺物の集中する南部を二分して、その北側を渠、南側を市において調査したものである。

調査の経過の概要は次のとおりである。

5月6日～5月9日 延4日間、調査区の北側より、トレンチの粗掘作業、遺物は表土下20～30cmの砂礫層より出土するが、地山までは北部で深く、10-15-19グリッドにおいては80cmに達し、南部では40～50cmである。

5月12日～5月16日 延5日間、50-69-62-71グリッド、800㎡を思い川B遺跡の調査区域とすることにした。なお北部・西部において、砂礫と混在して磨滅した土器片・石器碎片の出土が見られたが、遺物はほとんどが流れ込みによるものと思われ、遺構とは結び付かない。

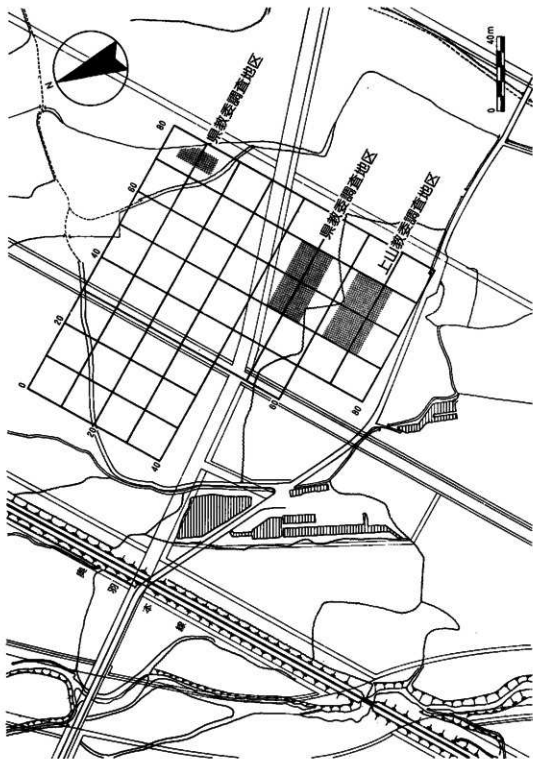
5月19日～6月13日 延20日間、B遺跡西半の、50-59-62-71グリッドを主に、I層（耕作土・20～25cm）、II層（黒色土・10～20cm・多量の砂利に流れ込みによる遺物が混在する）、III層（暗褐色粘質土）の順に排土しながら、IV層（暗褐色粘質微砂土）、V層（明褐色砂質土・地山）まで掘り下げる。微風、高温、乾燥で遺構の識別困難、散水しながらの作業。完形土器R P10・20出土、101・102号住居跡検出。

6月16日～6月27日 延10日間、西半の面整理と並行して、60-69-50-71グリッドの東半の遺構を追う、東寄りになるに従ってI、II層浅く、後世の攪乱により遺構は検出出来ない。101号住居跡と連らなって103号住居跡、102号住居跡に重複して1・2号土粒検出、初めて遺構と結び付いた完形土器R P58のほか土器片出土。6月24日には、一般市民・学生など100名の参加を得て現地説明会を行った。

6月30日～7月4日 延5日間、住居跡の精査、測量、写真撮影を行い、延44日間にわたる調査を終了した。

調査参加者氏名

木村又一・多田みわ・木村フミ・土屋又光・黒田康日故・黒田和子・木村貞・小川光輝
川口憲一・稲毛伸子・小島サダ・佐藤恵治・高橋善三郎・武田勝助・前田精・木村ヒサエ
木村マツエ・宇智英美代子・吉田博



1:2,000

第2図 思い川遺跡全体図

IV 発見された遺構

1. 遺跡の層序

遺跡は、東から西へ全体的に傾斜し、また南から北へ向っても緩やかに傾斜して、干枚田状に傾斜に従って作られた水田が広がっている。中央を干上がった思い川の河床が、南から北へ蛇行しながら約500mの地点で前川に合流する。

- I層 耕作土 多量の有機風化物を含み保水力に富む。10~25cm
- II層 黒色土 多量の砂礫及び流れ込みによる遺物を含み、酸化鉄が虫の通り道状に堆積、遺物にも付着している。10~20cm
- III層 暗褐色粘質土 粘質土で、炭化物風化粒子を含み粘質に富む。流失と攪乱のため、東側と西側では見当らず、中央南寄りで5~10cm。
- IV層 暗褐色粘質微砂土 粘質土に砂土を含み、粘質がある。遺構検出面
- V層 明褐色砂質土 地山。

2. 遺構の概要

本調査で検出した遺構は、住居跡5棟(検出1・確認4)、土壇2基であるが、中央部と西側で検出され、確認面は、III層下部又はIV層で認められ、V層を掘り込んで造られている。

a. 101・103号住居跡(第4図)

59-62-68-70グリッド内に位置して、重複関係にあり、103号が101号に切られている。平面プランは明確ではないが、101号は長径4.5m・短径3.9m、103号は長径3.6m・短径1.9mで、深さは、検出面より101号では20cm、103号は22cmである。周溝は検出されず、ピットは101号内に12ヶ、103号内に3ヶあるが柱穴の確認は出来ない。2~3ヶの石組と焼土も検出されたが、層位が異なり炉跡の確認にいたらず、遺物の床面出土もほとんどみられない。

b. 105号住居跡(第6図)

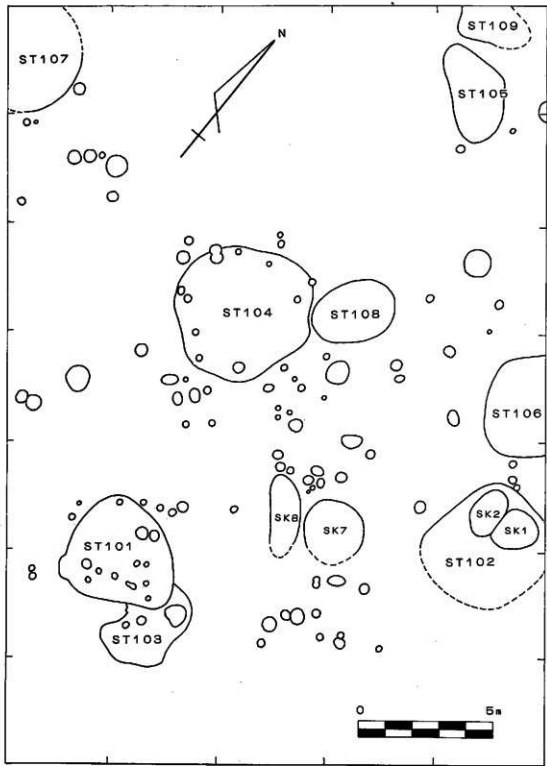
50-52-62-63グリッド内に位置し、半円形で確認され長径3.6m・短径1.9m、深さは16cmであり、周溝・柱穴・炉跡は検出されず、遺物の床面出土も無い。

c. 104号住居跡

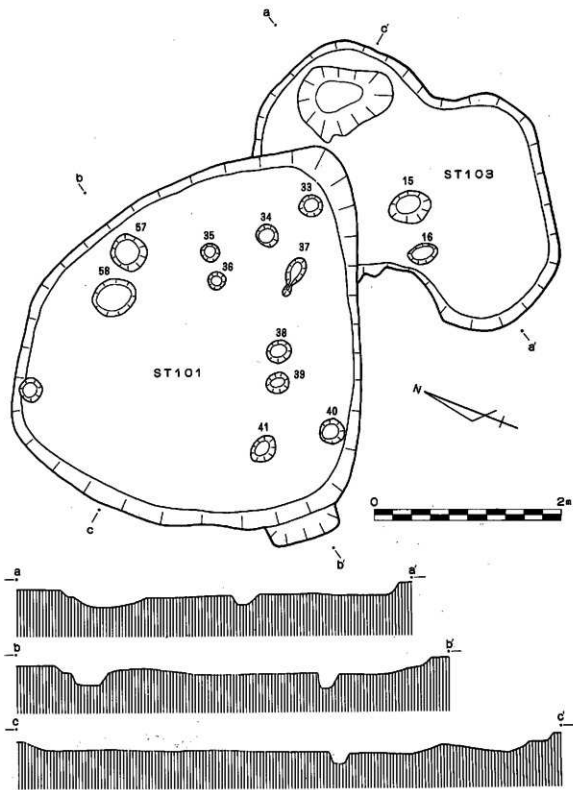
54-56-66-68グリッド内に位置し、IV層上面で検出された。壁の立ち上り及び床面は、明確に検出されないうがピットによりプランを推定した。覆土中よりRP9・10が出土。

d. 1・2号土壇(第5図)

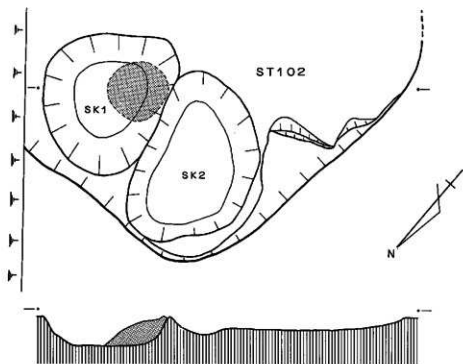
59-62-63グリッド内に、東側視角により、半円形に検出された102号住居跡に重複して作られたもので、新旧関係は1号→2号である。深さは、1号32cm・2号20cmで、遺物は、出土の状態から一括投棄されたものと考えられる。102号住居跡については、周溝、柱穴は認められない。



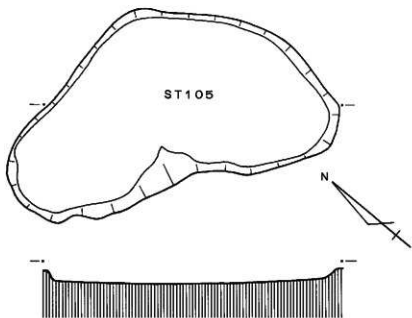
第3図 遺構配置図



第4图 101-103号住居跡



第5图 102号住居跡



第6图 105号住居跡

V 発見された遺物

1. 遺物の出土状況

遺物は、土器と石製品であるが、そのほとんどが、中央より西寄りの地域の表土下約30cmのII層から出土し、一部土坑内に廃棄されたものを除いては、流れ込みによるものが多く、床面出土はない。遺物は整理箱に90箱を数える。

2. 土 器

土器は、縄文土器、土製品として、土偶・耳栓・三脚土製品などが、整理箱に71箱出土したが、二次的な磨滅が著しく、判別しにくい状態である。

(1) 土 器

土器は、多数出土したが、総べて縄文中期（第9・10図 大木7b・8a・8b・9a式）に属し、器形は深鉢形が多く、器の表面全体に地文として単節縄文を施し、刺突・沈線と隆帯を組合せて施文してある。胎土には、石英砂が大量に認められる。

a. RP10（第7図・図版5・6）

55-67グリッド内の表土下30cm、104号住居跡の覆土中より、横転して押し潰され、表裏に二分して展開した形で出土、器高58cm・口縁部径52cm・底径22cmである。全体に縦位回転によるLR単節縄文（註）が施され、上縁より約 $\frac{1}{3}$ の頸部で、隆帯と沈線により口縁部文様帯と体部文様帯に区分し、また、縦に4単位に区分されて、渦巻文・刺突文などで文様が構成されている。

b. RP20（第8図・図版7・8）

57-66グリッド内のII層中より、横転して表裏に二分して展開した形で出土、器高60cm・口縁部径37cm・底径14cmであるが、体部中央がややふくらみ、その径34cmである。全体に縦位回転によるLR単節縄文が施され、中位の最大径のところで粘土紐を張り付け、沈線と隆帯で水平に上下に二分、その上部をさらに水平に二分した後、縦に八分して沈線と隆帯で文様が構成されているが、下部は地文のままである。

c. RP58（図版9・10）

59-63グリッドに位置する、土坑1号覆土第1層中より出土した。底部が欠損しているが、ほとんど完形に近い状態で検出され、遺構と結び付いて出土した数少ない遺物の一つである。器高27cm・口径18.5cm・底径9cm、器形は、底部から徐々に広がる円筒形の深鉢であるが、口縁がやや内湾しながら更に広がり、一方に隆帯による触先状の突出が見られる。全体にLR単節縄文を施し、体部は、細い粘土紐を張り付けて施文、口縁部は、縦位の捲糸圧痕が施文されている。

口縁部には、粘土紐が約1.5cmの小波状に貼付されており、突出した軸状の部分は、S形を内外に組合せた文様となっているが、粘土を形取り付着させて整形したものと見られる。

(2) 土 偶

出土した土偶は3点で、完形品は見られない。

a. RP11 (第11図・1)

50-67グリッド内で、表土下35cmのII層下部より、腕の付け根の彫らみがわずかに伺えるが、肩から上部が欠損した状態で出土した。高さ7cm・厚さ腰部で2.2cm・幅脚部底面最長径4.2cmである。腹部より下位が、象徴的に強大に作られ、腹部と腰部の彫らみと、太い脚部が印象的である。腰部は胎土を張り出させ、腹部は粘土塊を押し付けて隆起させてあるが、脚部は着け根で二本に分離し、底部で密着させて面積を大にして安定させ、立像としてある。脚の表裏に横に沈線で力強く施文してある。

b. RP76 (第11図・2)

56-70グリッド内で、表土下30cmのII層より、頭部と脚の下部を欠損した状態で出土した。高さ5.3cm・幅5.8cm・厚さ1.7cmの板状の土偶で、頭部と両腕は胎土を迫り出させ、女性をあらわす乳房は、体位の右側は欠損しているが、粘土塊を圧着して隆起させてある。尾尾をはさんで内割に迫出す曲線の沈線で、胸部の彫らみを象徴してある。

c. RP27 (第11図・3)

58-68グリッド内で、表土下28cmのII層より、右足の部分のみ出土した。現存高10.3cm・幅4.2cm・厚さ4.7cmである。腰より下部を強大に、両脚を二本に分離して作られたと見られる。立像の片脚であり、腰・太股・脛の盛り上がり、を、曲線の沈線で象徴してある。

(3) 耳栓 (第11図・4・5)

耳栓は、二点出土した。いずれもII層からである。

4. は小さい円の径は2.2cmで、次第に広がって中位で細まり、再び広がって、大きい円の径は2.7cmとなる。高さは1.7cmで、外径に応じて広がる孔を貫通して穿ってある。

5. は小さい円の径は1.5cm、大きい円の径は1.9cm、高さは2.1cmである。外径に応じて広がる孔を貫通して穿ってある。

(4) 三脚土製品 (第11図・6・7 第12図・8~14)

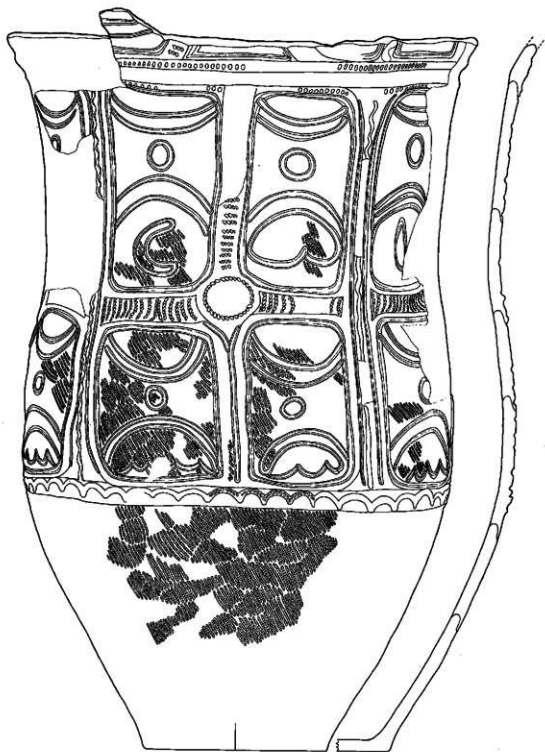
三脚土製品は、9点出土したが、土坑内からの1点を除いては、総べてII層からの表採品であり、欠損・磨耗が甚しい。いずれも正三角形の各辺を中心に向かって湾曲させ、それぞれの頂点に丸味を持たせた平面であるが、表面は中高で、裏面は凹ませてあり、断面は楕形である。表面には施文があるが、裏面は平滑で無文である。施文は、沈線と刺突によって構成され、中心より整然となされたものや、雑然としたものがあり、その内でも円の沈線、直線の沈線を主に施文したり、刺突を主にした施文などが見られる。磨耗により、地文の有無は識別出来ない。

(註) 施文を施す原体(編)の標記方法を示す。L R 単筋編文とは、原体を右摺り→左摺り→右摺りにしたもので、ここでは施文された方向(器面に表われた方向)で示した。

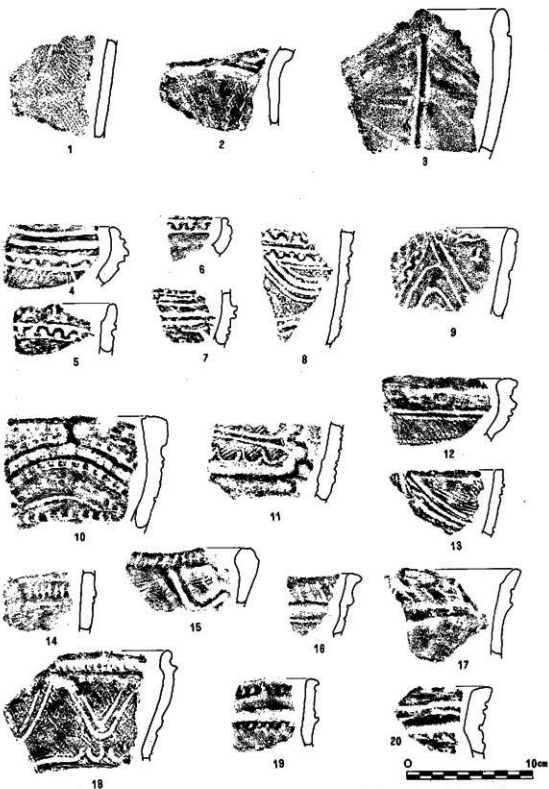


0 10cm

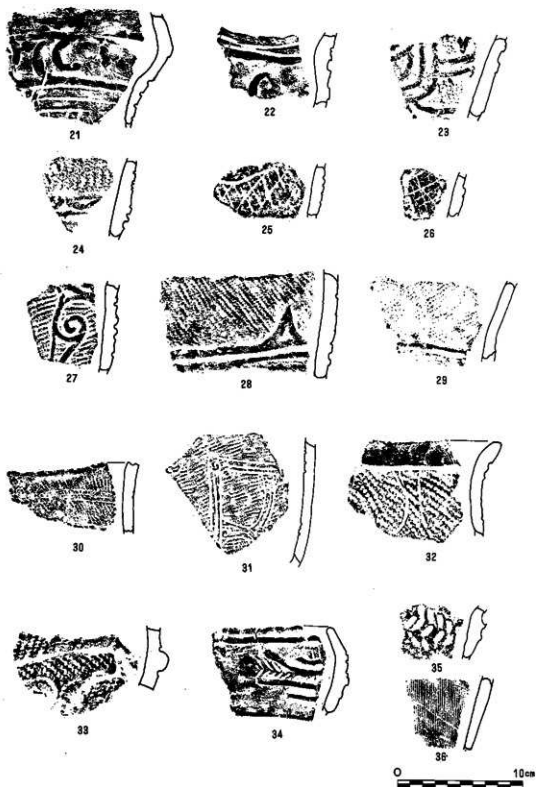
第7图 土器実測図(1) 完形土器RP10



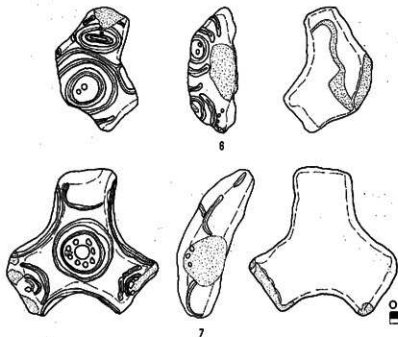
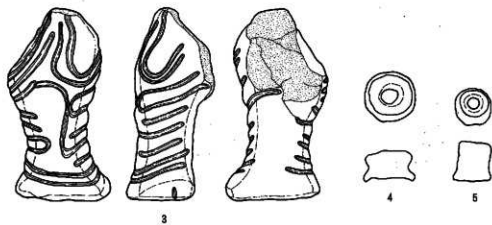
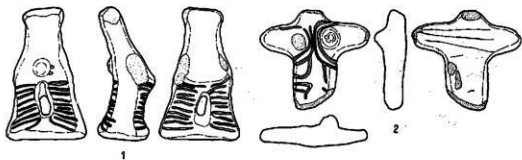
第8図 土器実測図(2) 完形土器RP20



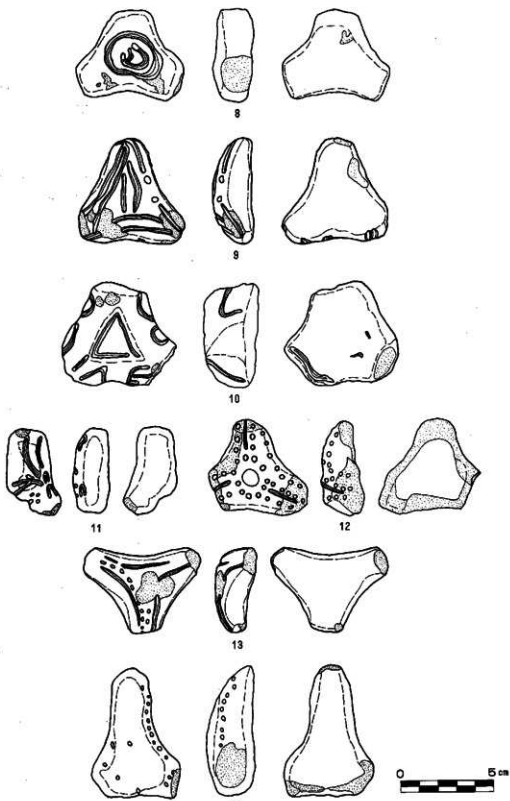
第9圖 土器拓本(1) 包含層出土土器



第10图 土器拓本(2) 包含层出土土器



第11图 土製品実測図(1) 土偶・耳栓・三脚土製品



14 第12圖 土製品実測図(2) 三脚土製品

3. 石 器

石器は、剥片・砕片をあわせると、製理箱で19箱出土した。ほとんどII層からの出土であり、種類は、石鏃・石錐・筒状石器・削器・石匙・三角石器・磨製石斧・有孔礫・凹石などである。打製のもの素材は、ほとんど頁岩で、磨製のものについては、花崗岩・安山岩・凝灰岩などである。本項では、その概要について記述する。

石 鏃 (第13図 1~6)

石鏃は、6点出土し、内の4点は完形に近いが、2点は先端が欠損している。いずれも二等辺三角形形状であり、底辺部がえぐられて無茎である。表裏両面にわたって、えぐりの部分にも丹念に剥離加工してある。

石 錐 (第13図・7~11)

石錐は、5点出土した。いずれも先端は欠損しているが、つまみの部分が比較的大きく、いわゆる手錐といわれるものである。11. はつまみの部分を削器に近い形に作ってある。

筒状石器 (第13図・12~16)

石筵ともいわれ、5点出土しているが、いずれも縦長の剥片を素材としている。表面の一部に自然剥離面を残しているが、両側縁から入念に剥離加工して、刃部を作っている。

削 器 (第13図・17~20)

剥片の側面に刃部を有するもので、4点出土した。17. は楕形で底辺は両面からの剥離で刃部を作り、20. は有孔の剥片を用いて、桑の葉先形に整形、刃部は表面の剥離で作られている。

石 匙 (第14図・23~34)

12点出土したが、いずれもつまみに対して刃部が直行して縦形のものである。つまみの部分は、両面から剥離加工してあるが、刃部は片面のみの加工が多く見られる。

三脚石器 (第14図・35)

1点出土したが、正三角形の各辺を、内側に湾曲させた形に、剥離整形してある。表面は、中央に向かって凹ませて打製され、表面中央は、正三角形の平面状に磨かれている。

磨製石斧 (第15図・1~6)

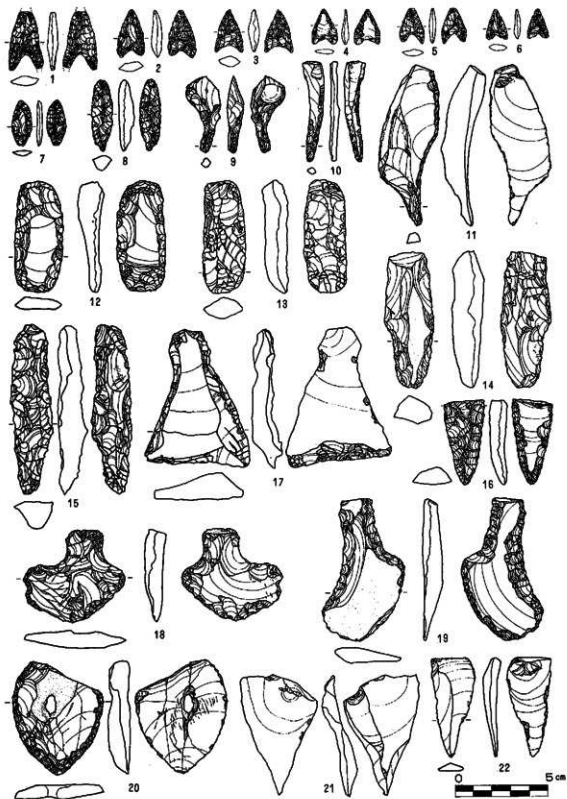
8点の出土が見られた。2点は完形品であるが、残りは刃部の欠損した頭部あるいは基部である。花崗岩の素材のものは、光沢の帯びる程に磨製されている。

有孔礫 (第15図・7)

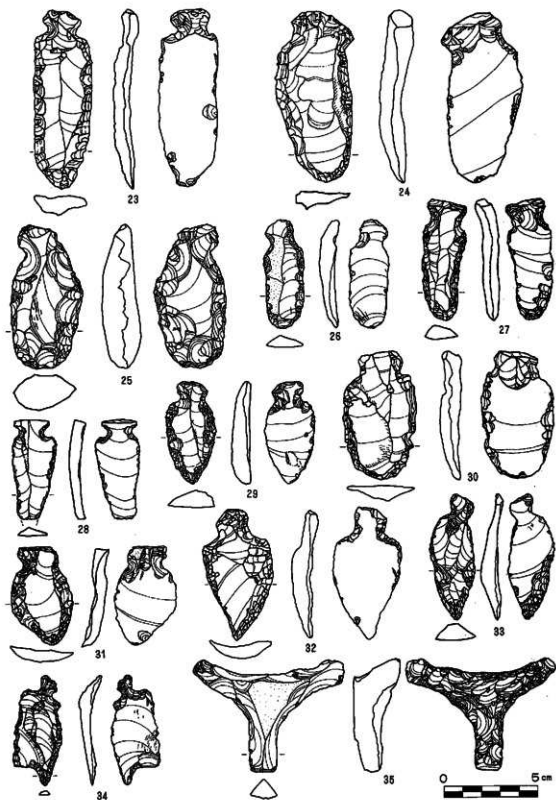
1点出土した。片面が剥離欠損しているので不明であるが、凹石・磨石ほどの大きさである。孔は自然のものか、穿孔によるものか識別は出来ない。

凹 石 (第15図・8~9 第16図・10~16)

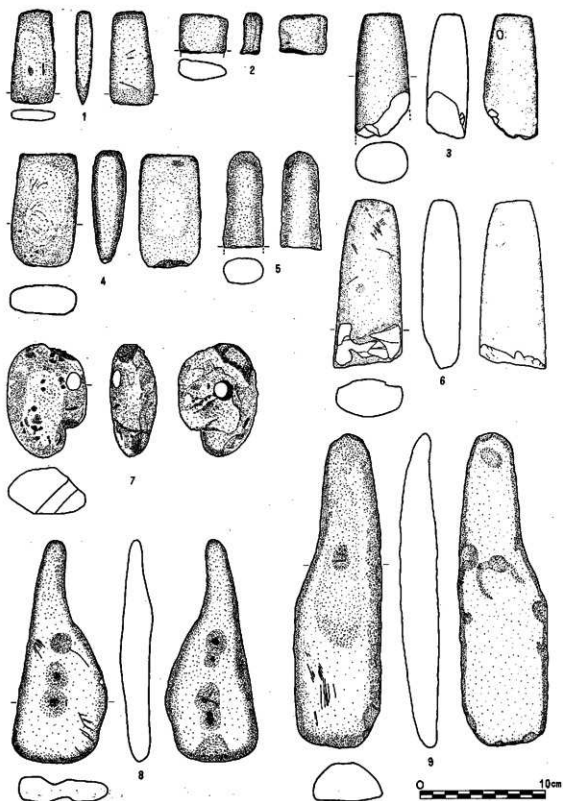
9点出土したが、形は円形・楕円形・細長い不定形などさまざまである。形や凹数などについて、規則的なものは無いが、片手で握れる程の大きさと、置いたときの安定性が共通している。



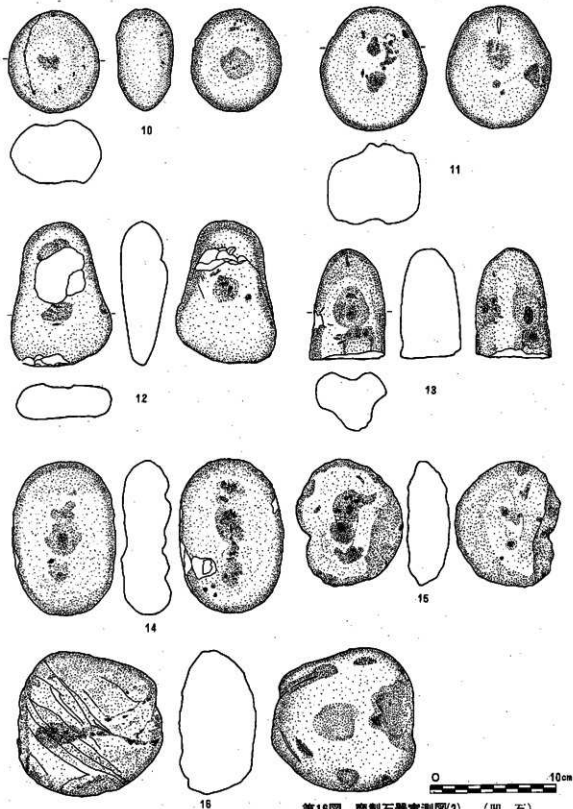
第13圖 打製石器實測圖(1) (石鏃·石錐·鏃狀石器·削器)



第14图 打製石器实测图(2) (石匙·三脚石器)



第15圖 磨製石器實測圖(1) (磨製石斧・有孔礮・凹石)



第16圖 磨製石器実測図(2) (凹石)

VI 調査のまとめ

1. 遺構について

今回の調査では、調査区の北部においては、耕作土より遺構確認面まで80～100cmと深く、またII層には流れ込みの砂礫を含み、磨滅した土器片の出土もあった。これらは、直接的には遺構との結び付きはない。

精査地区の東半は、攪乱のため遺構は検出されなかったが、西半は、全域にわたって住居跡8棟、土埴8基、溝跡1基、炉跡2、ピット100、などが検出された。

調査の時期は、5月～6月で、大気が乾燥し気温も次第に高温に向かい、微風も加わって土壌に亀裂が入り、割れ目が土中深く食い込んでV層に達し、V層上面の土を抱き込んで柱状に分立して、トレンチの壁が離脱崩壊する状態であった。ポンプ放水、如露散水など表面からのものは、面を混乱させるのみで、効果はほとんどなかった。

住居跡については、101・102号住居跡の他は、壁の立ち上り、床面などは明確でなく、平面プランもピット列から追ったものである。

また土埴については、1・2号土埴より一括土器の出土を見、これより当遺跡の時期が、大木7b～8式期に主体が覆かれることが判明した。

なお、住居跡の時期については、明確に床面出土土器とできるものがないため、各々の時期について断定することは許されないが、覆土及び包含層出土の土器により、大木8式期の所産と考えられる。

2. 遺物について

(1) 土器及び土製品

遺物のほとんどは、II層中からの出土であり、遺構と結び付けて考えられるものは、104号住居跡の覆土中より出土した完形土器RP9・10と、1・2号土埴から出土した完形土器RP58の他整理箱に4箱の土器片である。磨滅した土器片は、遺跡全面に散在し、一個体を成すものもあったが、多くは細片であった。土器のほか、土偶・三脚土製品・耳栓が出土した。

土器について概観すると、①綾くり文を施したもの(第9図1・2)、②刺突文を施したものの(第9図4～8)、③沈線により文様が構成されたもの(第9図18・第10図31・32)、④貼付けにより文様が構成されたもの(第10図21～23・27・28)、⑤篋状工具の先端による櫛描が施文されたもの(第10図36)、⑥隆帯のつけられたもの(第10図33)、⑦撚糸の圧痕がつけられたもの(第9図14・16・17)などがある。①は、縄文中期大木7b式に比定さる、②は、大木8a式、③は、大木8a～8b式、④は、大木8a式、⑤と⑥は、大木9式、⑦は、大木7b～8a式に比定される如く、大木7b～8b式に比定されるものがほとんどで、また少数

ながら三脚土製品の出土したことから見て「^{マダノ}牧野遺跡」(昭和50年調査・上山市教育委員会)との関連も考えられる。

(2) 石 製 品

石器は、剥片・碎片をあわせると1,000点近く出土し、内種別の明瞭なものは、石鏃6、石錐5、筥状石器5、削器4、石匙12、三脚石器1、磨製石斧8、有孔礫1、凹石9、などであるが、大半は、調査地域全面にわたって、II層中に土器片と混在して散布していた。1点であるが、三脚石器が出土し、また、磨製石斧の中に、宮川の河川敷に多い花崗岩礫を素材としたものがあり、その表面は、光沢の出る程に磨製加工されていたことが一つの特徴と言える。

圖 版



遺跡近景



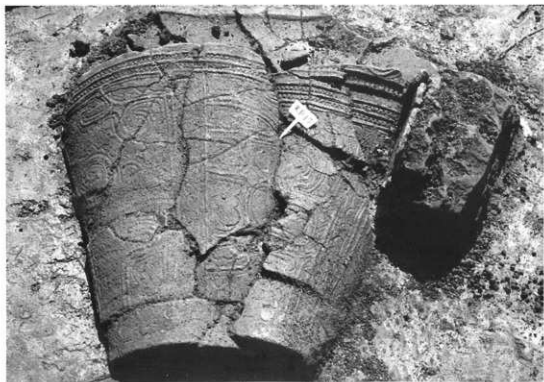
遺構全景



101・103号住居跡



102号住居跡



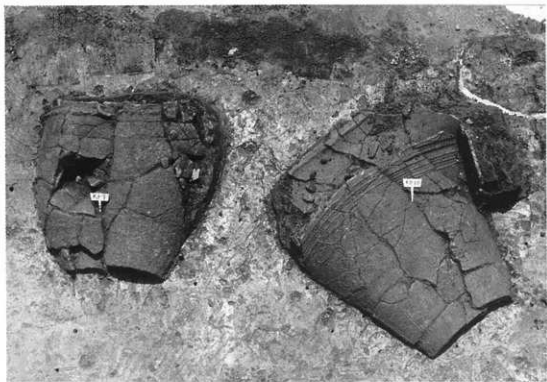
土器出土状況 (RP10)



土器出土状況 (RP20)



土器出土状況 (RP58)



土器出土状況 (RP 9・10)



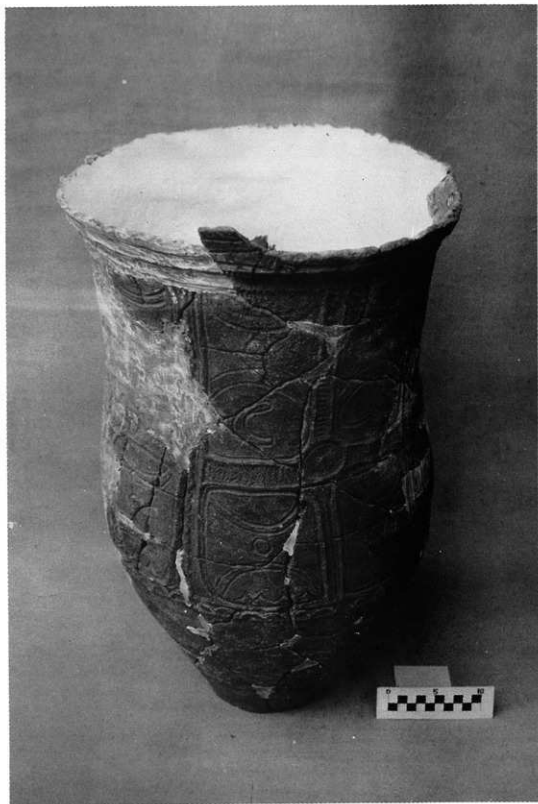
兜形土器 RP10 正面



完形土器 RP10 横面



完形土器 RP10 裏面



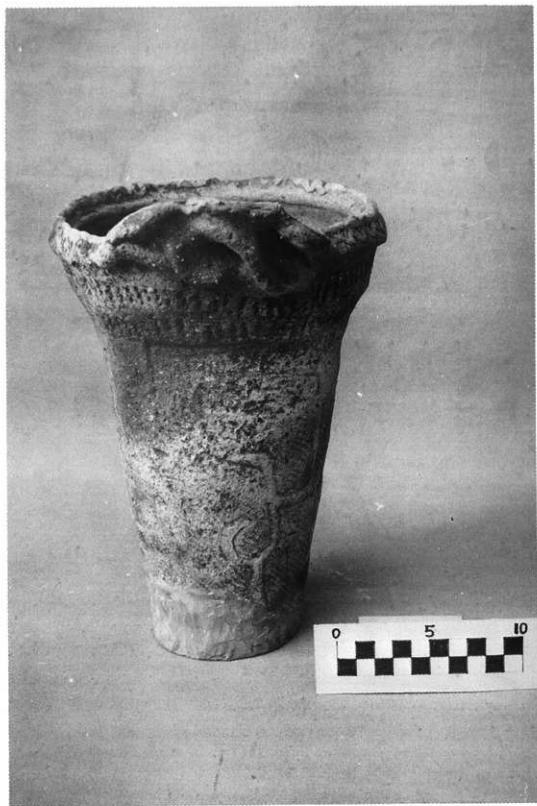
兜形土器 R P 20 正面



完形土器 R P 20 前面



完形土器 R P 20 裏面



兜形土器RP58正面



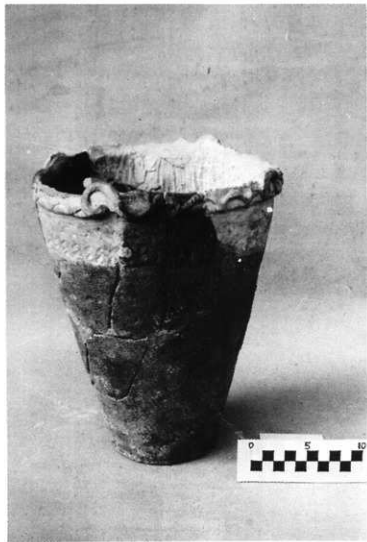
完形土器 R P 58 横面



完形土器 R P 58 裏面



完形土器RP72正面



完形土器R P72横面



完形土器R P72裏面



兜形土器（土坑内出土）



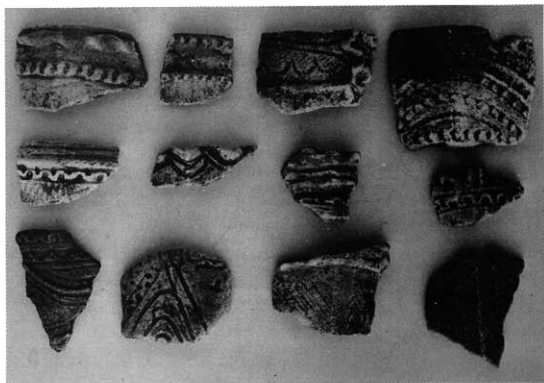
兜形土器（土坑内出土）



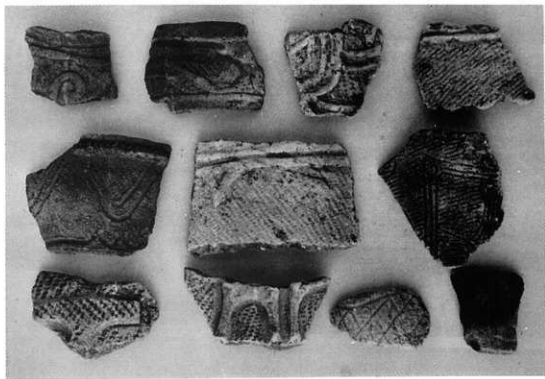
壳形土器（包含層出土）



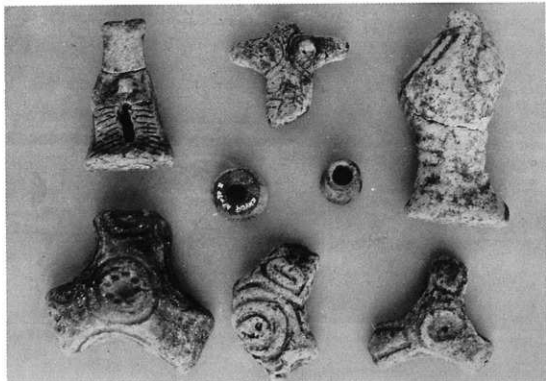
壳形土器（包含層出土）



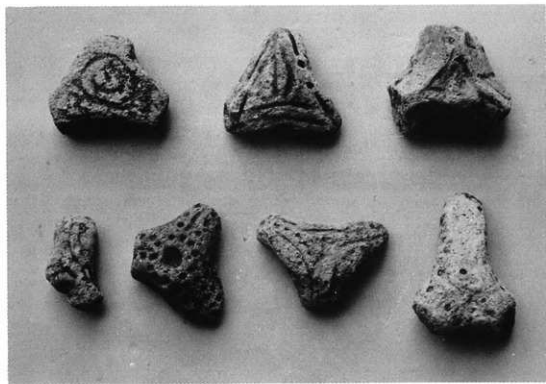
包含层出土土器片



包含层出土土器片



土製品 土偶・耳埴・三脚土製品



土製品 三脚土製品



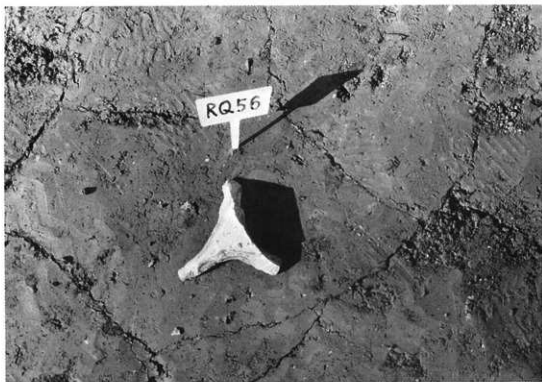
石器出土状況 RQ24



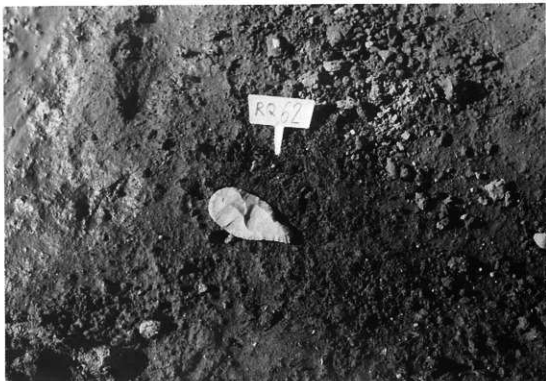
石器出土状況 RQ29・30



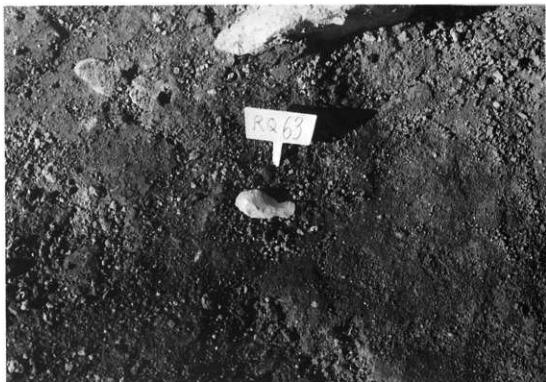
石器出土状况 RQ52



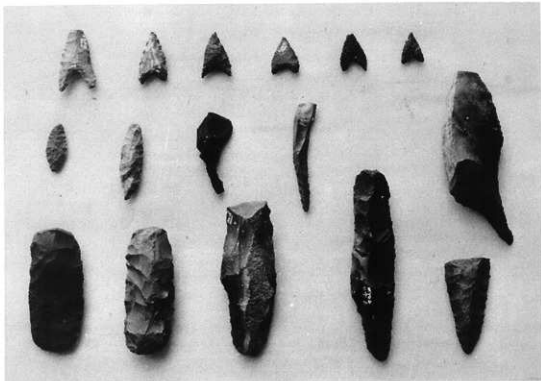
石器出土状况 RQ56



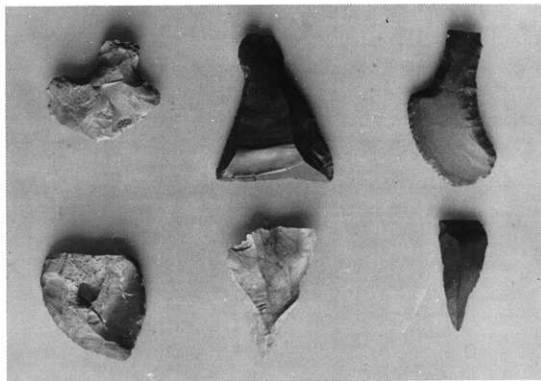
石器出土状况 RQ62



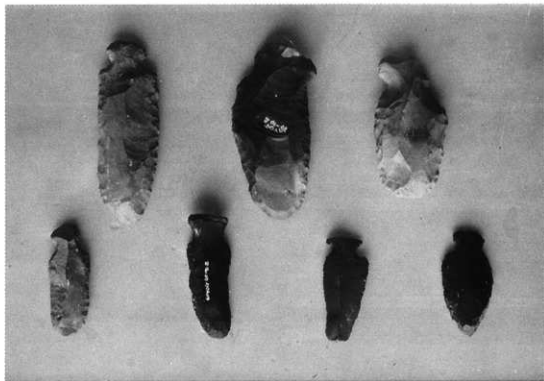
石器出土状况 RQ63



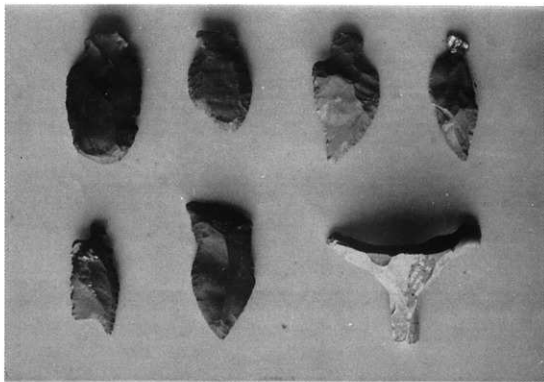
打製石器 石鏃・石鏃・石箭



打製石器



打製石器 石匙



打製石器 石匙・三脚石器



磨製石斧・有孔礮・凹石



凹石



発掘風景



発掘風景



現地説明会風景



現地説明会風景



現地説明会風景



調査参加者

山形県上山市埋蔵文化財調査報告書第2号

上山市思い川B遺跡

発掘調査報告書

昭和56年3月30日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 上山市教育委員会

印刷 (有) 加藤印刷